

### 3. キウス4遺跡における縄文時代後期後半の土器

#### 1) はじめに

キウス4遺跡の各報告では、縄文時代後期の主体時期に対する分類として、「IV群c類」堂林式を基本としながらもその前後型式についての解釈に微妙な相異がある。筆者自身も先行の報告と近年の報告とでは分類を異にしている部分がある。ここではキウス4遺跡で出土した当該期の土器を改めて見直し、堂林式とその前後型式との画期を求め、堂林式の細分を試みた。

#### 2) 当該期の土器型式名について

縄文時代後期後半の土器編年、特にエリモB式をめぐる経緯については、『キウス4遺跡(2)』において袖岡がまとめている。また近年では、後期後葉の諸型式設定に関する昭和初期段階からの研究史を工藤肇(苫小牧市)がまとめている(工藤2000)。

#### 鯨潤式とエリモB式

『キウス4遺跡(2)』では、「便宜的に」刻み列をもつ土器を「鯨潤式の新しい部分またはエリモB式」として堂林式から分離した。これは、「刻み列」が鯨潤式成立および衰退の重要な要素であることによる。突瘤や刻みなどの文様要素を層位別に属性分析したところ突瘤の変化よりも刻みの衰退が層位的に如実に現れているのである。

縄文時代後期中葉の土器については1976年に鷹野光行がトコロチャシ南尾根遺跡の出土土器に基づき、手稲式→鯨潤式→エリモB式と再整理して位置付けた。しかし突瘤がエリモ遺跡B地点の土器にはあるが鯨潤式には見られない点が以前から指摘されていた(名取・松下1969)。1989年、小樽市忍路土場の出土土器から鯨潤式を4段階に分類(VI～IX期)した田口尚は、その3・4段階にエリモB式を対比させ、鯨潤式の新しい部分に併行する型式として位置付けた(北埋調報53)。突瘤と刻みを併せもつ「エリモB式」は、その分布が限られており、鯨潤式は少なくとも道央部一帯に広がっている。以上のような事情から、「エリモB式」が大きくは鯨潤式の範疇に収まることから、本稿では汎用されている「鯨潤式」の名称を用いることとする。

#### 堂林式

1967年「長沼町幌内堂林遺跡調査報告」において、野村崇が提唱している。突瘤の施される第一群と沈線主体の第二群が層位的に同時存在し、別々の機能をもっていたとされる。提示された資料を見ると、鋸歯状沈線や帯状文、ハの字状短刻線など今回のキウス4遺跡出土土器の各段階の要素が見られるが、三叉文につながる文様のある土器が含まれるなど全体的にはやや新しい段階のものが多いようである。刻み列をもつものがわずかに数点含まれているものの、貼瘤や爪形文に近い文様をもつものは含まれていない。こうした点を尊重して、今回のキウス4遺跡における分類を行っている。

#### 三ツ谷式

乙部町三ツ谷貝塚の資料をもとに大場利夫らによって設定された型式である。設定された資料が堂林式から上ノ国式にかけての資料が混在し、過渡的な段階の様相を呈している。その後他地域での出土例から、突瘤と爪形文が並存する土器が加わるなど、三ツ谷式の解釈に変化が生じている。標識遺跡から遠いことなども含めて、今回の分類では「三ツ谷式」をそのまま用いず、この段階の土器を「三ツ谷式」併行、としている。ただし三ツ谷貝塚で提示された資料の主体は沈線文と「隆点」(小型の貼瘤か)であり、これに爪形文の初現的なものを加えて「三ツ谷式」を理解していく方向性もある。いずれにせよキウス4遺跡では、多くはないもののこの段階の土器がまとまりをもって出土している。

### 3) 各段階の内容と変遷(図Ⅲ-15・16)

#### 鯨潤式一新(末)段階

盛土遺構下位の中でもさらに下位の部分や低地部から出土した資料などに基づいている。忍路土場遺跡での編年で鯨潤式4段階中の4段階目(Ⅸ期)にあたる。刻み列のある土器を一括しているが、緩やかな波状口縁をもつものや磨消を多用し区画内を羽状縄文が充填する土器など、この段階より一段階古いと考えられるものが含まれている(4・10・14など)。

〔器形〕深鉢の口縁は緩やかに波を打つ5単位の波状口縁が残る(2)が、波頂部が尖るものが出現する(1・3)。口唇は肥厚する切出形がまだ残っている(1)が、肥厚しない切出形口唇がみられるようになる(5)。深鉢の胴部くびれはやや強い。また器壁が7mm以上の比較的厚い土器が多い。底部は平坦で面積の大きいものが多い。鉢には大型の台が付くものがある(6・14)。注口土器は球体に近く、口頸部が太く短く直立するものが多い。微隆線をもつ搬入土器も球体に近い(17)。

〔文様〕鯨潤式で盛行した口縁部や頸部の刻み列が残るものの、衰退する。2条単位の刻み列であったものが1列になったり(4・5ほか)、沈線でえがいた刻みになったりする(8)。また刻み列のほかに突瘤が施され始める段階である(2・4)。胴部の文様は弧線文や入組文を主体とした帯状文が健在で、磨り消しや充填縄文により区画内を施文している。またこの段階で鋸歯状沈線や弧線文を規則性をもって密にえがく文様が出現する(3・5・7)。注口土器は弧線文や入組文を主体とした帯状文が主体である。胴部の貼瘤はやや大きな瘤状のものが続き、縦割りのものも多くみられる(12ほか)。

#### 堂林式一古段階

盛土遺構下位の比較的上位の部分や、盛土遺構の中位の層から出土した資料などに基づいている。

〔器形〕深鉢の口縁は緩やかな波状口縁が姿を消し、波頂部が尖る5単位の波状口縁が多くなり、平縁では5単位の小さな突起をもつものが多くなる。口唇は肥厚しない切出形口唇が多くなる。深鉢の胴部くびれはやや弱くなる。器壁のやや厚い土器がまだ多く残っている。注口土器は引き続き口頸部が直立するものもあるが、口縁に向かってすぼまる形態をもつものが多くなる。

〔文様〕刻みが抜けて3本の横走沈線のみになるものがある(19)。深鉢から浅鉢まで各器種の口縁部に突瘤が施されるようになる。縄文地に突瘤のみの土器が圧倒的に多い。また無文の土器も目立っている。胴部に文様が施されるものでは、帯状文が残るものの(18)、鋸歯状沈線(20)や弧線文(21)が規則性をもって密にえがかれ、帯状文の沈線化が進む。注口土器は鯨潤式の名残が顕著で、弧線文や入組文を主体とした帯状文が施文されている(26・27)。頸部と胴部の境に巡っていた刻み列が隆帯(26)や3本の横走沈線に置き換わっているものもみられる。また帯状文の沈線化が進むが、規則性のある弧線文の組み合わせがほとんどである(28・29)。

#### 堂林式一中段階

盛土遺構の中位の層や、盛土遺構上位のうち比較的下位から出土した資料などに基づいている。中規模の周堤墓から出土した注口土器も含まれる(44)。

〔器形〕深鉢の口縁は、波状口縁の単位数がそれまでの5単位から徐々に増加する(34・35)。口唇は鋭角になり鋭い切出形口唇が多くなる。深鉢の胴部くびれはだんだん弱くなる。また器壁が5～7mmの薄い土器になってくる。底部は小さくなり、上げ底気味にくぼむようになる。鉢には小さな台がつくものもある(38)。注口土器は口頸部が長くなる傾向がある。口縁に向かってすぼまり、口縁部付近で小さく外反する形態をもつものが多くなる。また胴部最大径がやや下方になっていく。微隆線で文様が構成され搬入と考えられる土器は、環状(48)など特殊な形態の土器が現れるようになる。

〔文様〕突瘤が施される深鉢が盛行し、特に口縁部に突瘤と横走沈線がめぐる深鉢が圧倒的に多くな

る。胴部くびれの無文帯はだんだん幅広になる。胴部に文様が施されるものでは、鋸歯状沈線や対向弧線文などがやや不規則になるものも目立ってくるようになる(39)。带状文は少ないが、入組带状文が続いている。鉢では区画内の縄文が消滅したり、ハの字状短刻線で充填したりするものが現れる(40)。注口土器は带状文の区画内に沈線を密に充填するものや全面縄文地に弧線文の組み合わせを密にえがくものが主体である。微隆線をもつ土器は、隆带状に細い刻み列が施されるものが多くなる。

#### 堂林式－新段階

盛土遺構の中位～上位の層から出土した資料などに基づいている。

〔器形〕深鉢の口縁は、波状口縁の単位数がさらに増加し、10単位を超える「小波状口縁」が現れる(52)。鋭い切出形口唇で、段をもつものが多くなる。深鉢の胴部くびれはだんだん弱くなり目立たなくなる。底部はさらに細くなるものが現れる(55)。注口土器は口頸部が長くなる傾向が続くが、太くなり口縁部が広がる傾向にある。微隆線の搬入と考えられる土器は、巻貝形(64・65)がある。

〔文様〕胴部くびれの無文帯はさらに幅広になり、口縁部の文様態が(突瘤+)横走沈線のみになるものが現れる(53)。胴部に文様が施されるものでは、带状文が形を変えて増えてくる。蛇行したり渦をえがいたり、直線的な带状文と曲線的な带状文を組み合わせたりと多様化している。入組带状文が変化し、クランク状の带状文が現れる(51・55)。带状文にはその区画に沿って列点(51)が施されたり、刺突が充填されたりするものも現れる。鉢では区画内の縄文がないものが増え、ハの字状短刻線で充填するものが多くなる(56)。注口土器では、全面縄文地のものは沈線が乱れる(58)。鋸歯状の带状文が現れ、带状文の区画に沿う列点やハの字状短刻線で充填されるものが多くなる。

#### 「三ツ谷式」併行

盛土遺構の上位の層やさらにその上位のⅤa層から出土した資料などに基づいている。

〔器形〕小型の深鉢に胴部の張り出すもの(69)が現れる。また広口壺(74)が出現する。注口土器は口頸部がさらに大型化し、底部に台状の作り出しをするものが現れる(76)。

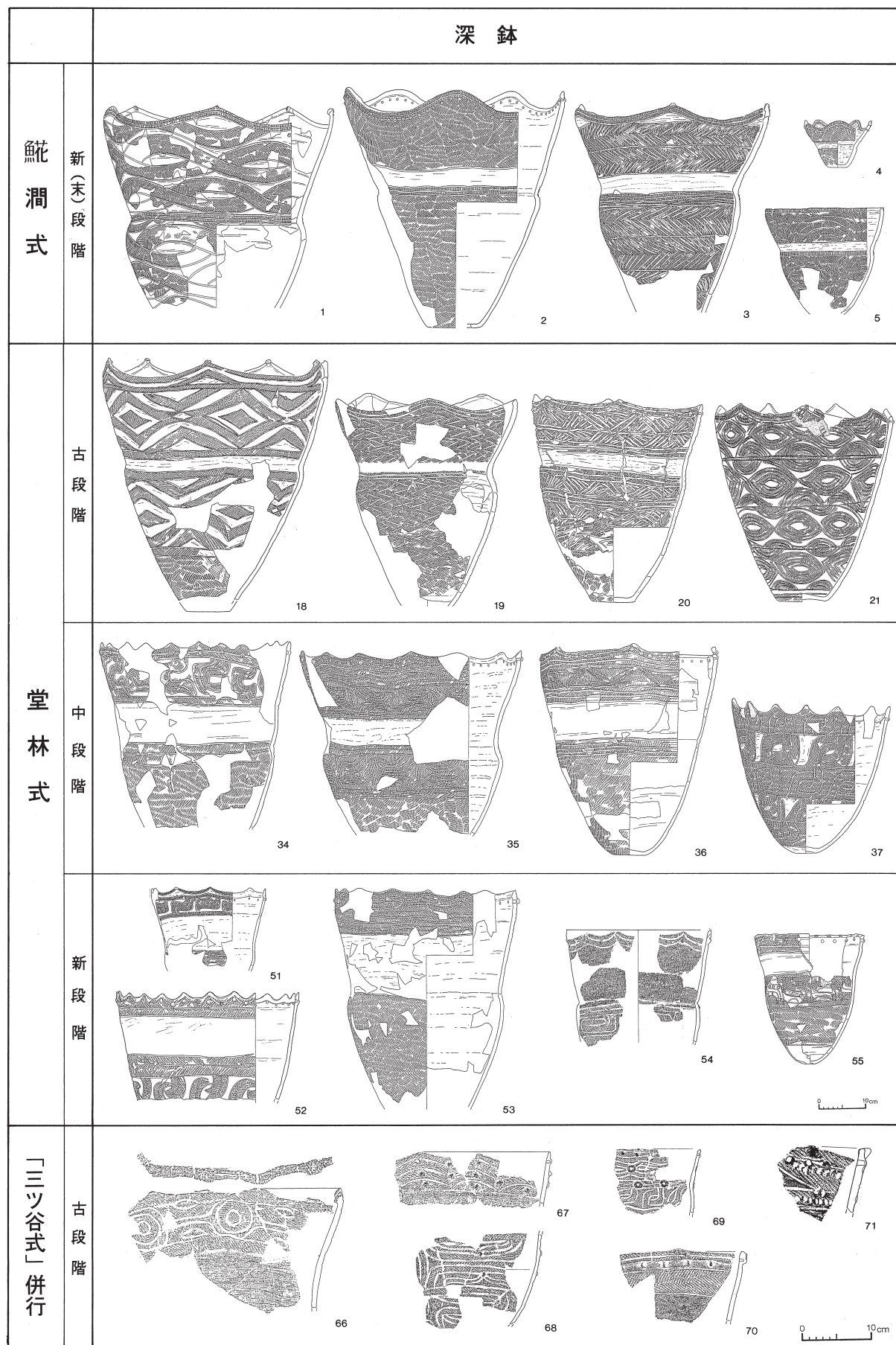
〔文様〕豆粒状やボタン状の貼瘤が多数付され始める。突瘤は縦長につまみ出された状態になり、爪形に近づいている(70)。やや不規則な带状文や沈線がえがかれている。壺形土器は縄文地よりハの字状短刻線や刺突などが目立つ。

全体的な諸要素の変遷を表Ⅲ－3に示した。深鉢では厚手から薄手への器厚の変化、波状口縁の単位の増加と平坦化、口唇の鋭角化、胴部くびれの平坦化とそれに伴う無文帯の拡大・口縁部文様帯の縮小化、带状文の沈線化とクランク文への変化、羽状縄文の多用から斜行縄文主体への変化などが挙げられる。壺・注口土器では、主に長頸化と器形(器種)の多様化、带状文の沈線化・ハの字状短刻線による充填などが挙げられる。

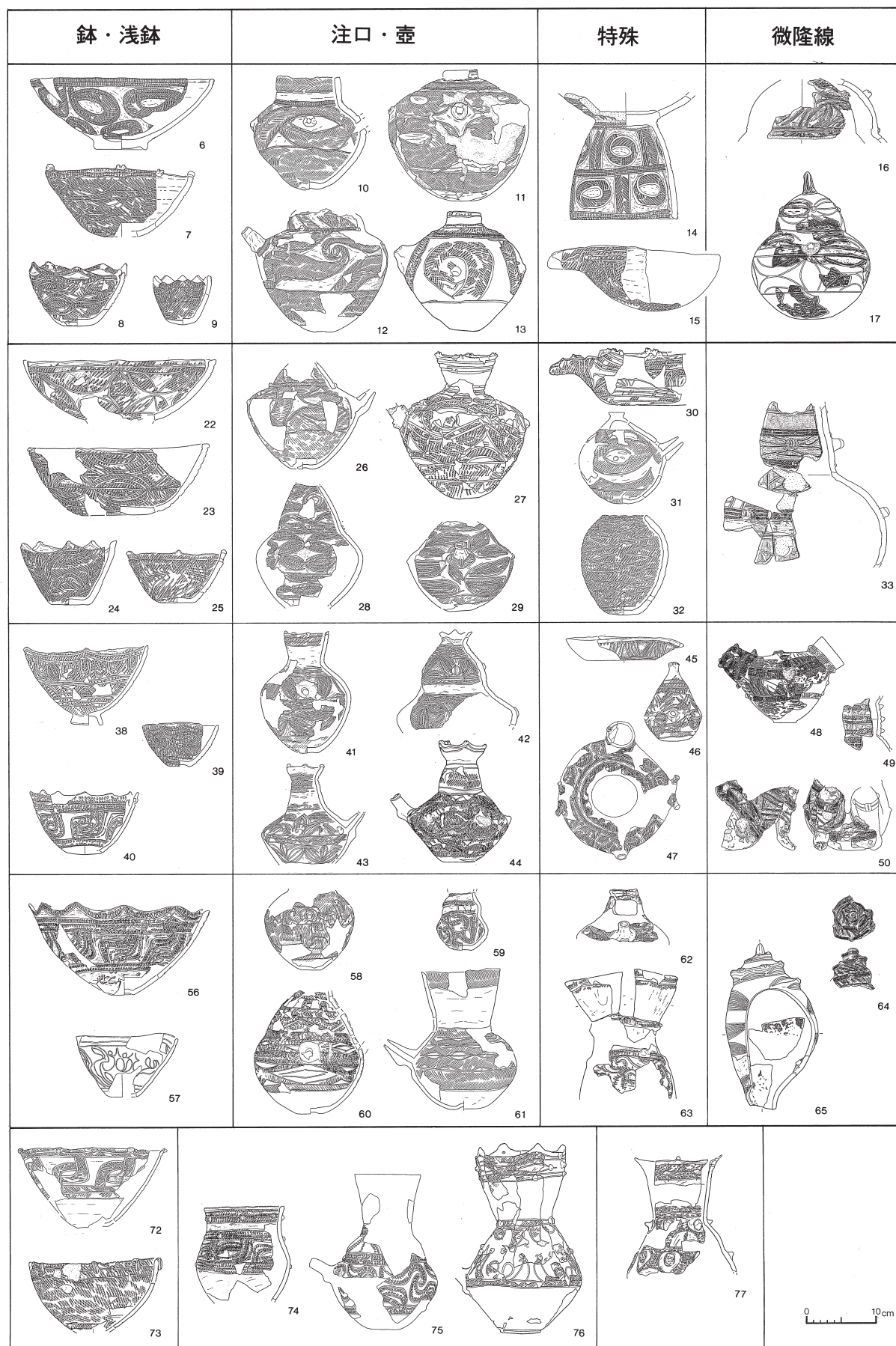
#### 4) おわりに

キウス4遺跡の膨大な出土土器を扱ったにもかかわらず、時間的制約と不手際により十分に検討することができなかった。しかし、堂林式の内容やその変遷を示し、その前後型式について触れることができた。堂林式の前に刻みと突瘤を併せ持つ一群があり、大きくは鯰潤式の範疇に入る。この分類が認められるならば、周堤墓を含めたキウス4遺跡の遺構群は鯰潤式の新(末)段階の土器が使用される時期から造営され、本格化する中で新型式の堂林式土器が成立するということになる。また貼瘤や爪形文が施される、堂林式とは分離される一群の土器(「三ツ谷式」併行)が成立し発展する中でキウス4遺跡の集落が衰退するという経過をたどると説明することができる。



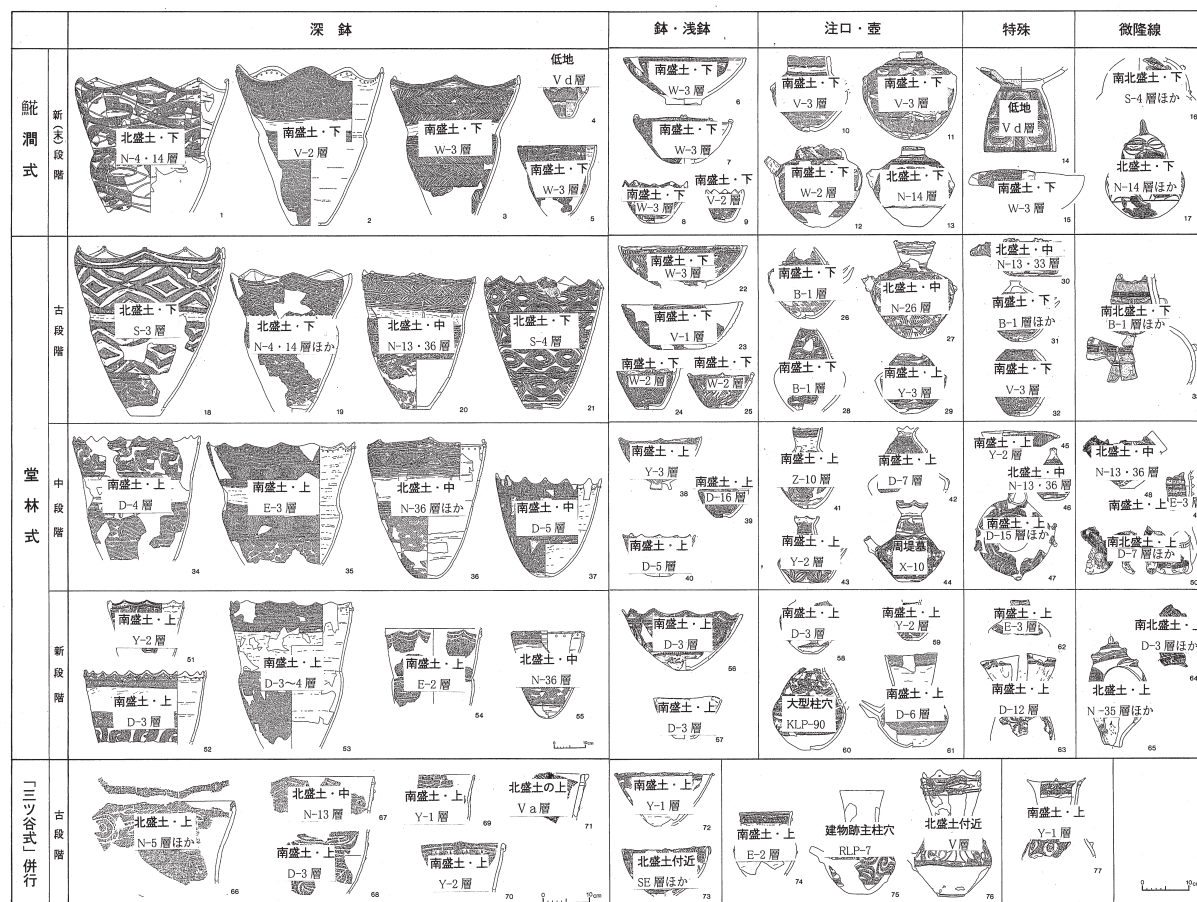


図Ⅲ-15 キウス4遺跡出土の縄文時代後期後半の土器 (1)



図Ⅲ-16 キウス4遺跡出土の縄文時代後期後半の土器（2）





図Ⅲ-17 掲載土器出土遺構・主体層位

表Ⅲ-3 出土土器諸要素の変遷

| 器種       |        | 深鉢・鉢・浅鉢 |                 |    |       |                    |     |    |     |                             |                                         | 注口・壺      |     |       |     |        |     |                           |                       |                           |               | その他  |
|----------|--------|---------|-----------------|----|-------|--------------------|-----|----|-----|-----------------------------|-----------------------------------------|-----------|-----|-------|-----|--------|-----|---------------------------|-----------------------|---------------------------|---------------|------|
| 要素       |        | 器形      |                 |    |       |                    | 文様  |    |     |                             |                                         | 器形        |     |       |     |        | 文様  |                           |                       |                           |               |      |
|          |        | 器壁      | 波状口縁            | 口唇 | 胴部くびれ | 底部                 | 刻み  | 突瘤 | 無文帯 | 帯状文                         | 沈線                                      | 地文        | 口頭部 | 胴部最大径 | 注口部 | 底部     | 刻み  | 貼瘤                        | 帯状文                   | 沈線                        | 地文            |      |
| 甕調式      | 新段階    | 厚       | 緩やか・5単位         |    | 強     | 平・広                |     |    | 狭   | 曲線帯状文主体                     |                                         | 羽状縄文多い・磨消 | 太・短 | やや上   | 太・短 | 平      |     | やや大・縦割り有り                 | 曲線帯状文主体               |                           | 区画内充填羽状縄文・磨消  | 単孔土器 |
|          | 新(未)段階 |         | 波頂部尖り始める・5単位    |    |       |                    |     |    |     | 曲線帯状文主体<br>(棒かけ状入組文・渦文などあり) | 密な沈線出現<br>(帯状文の沈線化)<br>イナズマ沈線・鋸歯状沈線・弧線文 |           |     |       |     | 極小の上げ底 |     | 曲線帯状文主体<br>(棒かけ状入組文・渦文など) |                       |                           |               |      |
| 堂林式      | 古段階    |         | 5単位から少し増える(7単位) |    |       |                    |     |    |     | 鋸歯状の帯状文あり                   | 密・細沈線本格化<br>イナズマ沈線・鋸歯状沈線・弧線文            | 羽状縄文崩れ始める |     |       |     |        |     | 平坦化                       | 帯状文の沈線化<br>イナズマ沈線・弧線文 | 全面縄文出現・本格化                | 香炉形土器         |      |
|          | 中段階    |         | 単位さらに増加         |    |       | 上げ底<br>気味・丸底<br>気味 |     |    |     | 入組帯状文多用・ハの字状短刻線出現           | 細沈線<br>文様構成が崩れる<br>(多様化する)<br>入組文増える    | 細         | 中   | 細・長   |     |        | 小型化 | ほとんどなし                    | 細沈線<br>文様多様化          | 全面縄文本格化                   | 環状土器          |      |
|          | 新段階    |         | 小波状口縁出現         |    |       | 上げ底あり              |     |    | 広   | クランク文多用・ハの字状短刻線多用           | 沈線<br>文様構成が崩れる<br>(多様化する)               | 斜行縄文多い    |     |       |     |        |     |                           | 山形文・ハの字状短刻線多用         | 沈線<br>文様構成が崩れる<br>(多様化する) | 無文部増加<br>双口土器 |      |
| 「三ツ谷式」併行 | 古段階    |         | 小波状口縁本格化        |    |       |                    |     |    |     | 円文なども多くなる・ハの字状短刻線やや減少       |                                         |           | 太・長 |       |     | 台の作り出し |     | ボタン状出現・小型貼瘤の多様化           | ハの字状短刻線多用             |                           | 無文部さらに増加      |      |
|          | 新段階    |         | 薄               |    | 弱     | 狭                  | 爪形文 |    |     | ハの字状短刻線減少なくなる               |                                         |           |     | やや下   |     |        |     |                           |                       |                           |               |      |

※ この表は各時期の主体となる要素を示した概念的な表である。網掛けの時期はキウス4遺跡では主体的に出土していない。